

<b>Title</b>	都市と文化の社会学に向けて：芸術家とジェントリフィケーションに関する近年の研究動向からの視座
<b>Author</b>	笹島 秀晃
<b>Citation</b>	都市文化研究. 17 巻, p.97-102.
<b>Issue Date</b>	2015-03
<b>ISSN</b>	1348-3293
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科：都市文化研究センター
<b>Description</b>	<シンポジウム>市大文学部と「都市文化研究」再考：大阪市立大学文学部創設 60 周年記念学術シンポジウム
<b>DOI</b>	10.24544/ocu.20171213-035

Placed on: Osaka City University

# 都市と文化の社会学に向けて

—— 芸術家とジェントリフィケーションに関する近年の研究動向からの視座 ——

笹島 秀晃

## ◆要 旨

60周年シンポジウムの第1セッションのタイトルは「研究フロントとしての大阪」であった。このテーマで求められていたものは、自身の研究分野の最前線を踏まえたうえで、大阪という都市において、もしくは大阪という都市を対象に研究することの意義を示すことだった。それゆえに、このテーマにこたえるためには自身の研究分野のフロンティアを示しつつ、そこにおける筆者自身の研究テーマの位置づけを明示すること。加えて、これら二点を踏まえて大阪で研究をすることの意義を示すことが求められる。したがって、本稿ではこれらの論点について順次記述していく。

キーワード：グローバル化、都市と文化、芸術家街、ジェントリフィケーション、下位文化

(2014年9月5日論文受付, 2014年11月7日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

## 1. 都市社会学におけるフロンティアとは何か？

筆者は2012年にアメリカの大学で在外研究をする機会を得た。その時の受入れ教員であったスティーヴ・ヴェンカテッシュ教授に、アメリカ都市社会学のフロンティアについて尋ねたことがあった。日本の都市社会学では問いのフロンティアが見えづらく、ディシプリンとしての独自性に疑問を感じるがあった。他方、アメリカの都市社会学には、そうしたものがあるかもしれないという淡い期待があった。

ヴェンカテッシュ教授の返答は意外なものだった。その時の彼の言葉を正確に思い出すことはできないが、次のようなニュアンスの発言をしていたと思う。「そういったものはないと思うよ。コロンビアにはサッセンがいて、ハーバードにはサンプソンがいて、バークレーにはヴァカンがいる。それぞれが火山の噴火口のように自由に研究していて、もちろんお互いが今どのような研究をしているか大まかには知っていると思うけれど、そこに共通の問題意識を見つけるのは難しいと思うよ」<sup>1)</sup>。今回のシンポジウムのテーマを聞いた時、ヴェンカテッシュ教授とのやり取りを思い出した。

都市社会学の独自性として、大まかには次の二点を挙げることはできるだろう。一つは、都市という範囲にお

いて発生する空間的現象の変動メカニズムを実証的に分析すること。もう一つは、都市という空間を独立変数とみなして（最も古典的には、ルイス・ワースが示したように、人口数・人口密度・人口の多様性によって計測される）、その空間内で活動する個人のパーソナリティや社会生活に与える影響を分析することである。しかし、こうした都市社会学像はあくまで理想的・教科書的なものであって、大半の都市社会学者は、その枠組みにとらわれず多様な論点を射程にしている。加えて、今日では都市社会学・地理学・都市計画学との相互参照は著しく、都市研究 Urban studies における都市社会学の独立性は自明なものではない。そもそも、現在の都市社会学において「フロンティア」が形成できるほどの研究者集団としての凝集性があるのか（あるべきなのか）否か、本来ならばそのことから議論する必要があるのかもしれない。

こうした都市社会学の動向を踏まえると、これから筆者が書き連ねる論点が「都市社会学のフロンティアである」などととても言うことはできない。だが、筆者に与えられた課題を放棄することもできない。それゆえに本稿では、筆者が関心を持ち研究を行っているテーマの「現在」を示すことで、一つのアイデアを提示することにとどめたいと思う。

## 2. グローバル時代の都市と文化

近年、主に英語圏の都市研究者は、自治体による美術館建設や国際美術展の開催、また文化産業に対する助成事業など、文化（芸術・飲食業・ファッション）の生産・消費機会の形成が、都市経営においてより一層重視される現代社会の動向に関心を向けてきた。

例えば、こうした動向の一つの現れとして、著名な建築家による意匠をこらした美術館建設の流行がある。1997年、フランク・ゲーリーによって建設されたビルバオ・グッゲンハイム美術館はその象徴的事例であった。重化学工業の衰退により低迷していた港町ビルバオに建設された、流曲線の金属板を貼り集めた独自の形状を持つ美術館は、境界の再開発と共に都市再生における「成功」の象徴として注目を集めた。美術館の実質的な社会的影響については議論の余地があるものの、少なくとも一般的な言論の水準では、「建築のスペクタクルが集客の成功をもたらし、世界のなかで話題になる美術館が一種の観光資源であり都市セールスの最高の道具であることの一つであることを証明する」ものとして言及されてきた（南條 2008: 3）。

都市研究者は、こうした動向を「経済的基盤として文化を活用する use culture as economic base」都市（Zukin 1995）、「エンターテインメント・マシンとしての都市 The city as an entertainment machine」（Clark 2004）、「クリエイティブ・クラス The creative class」の集積する都市（Florida 2002=2008）の出現として議論してきた。まちづくり論や都市経営論のなかでは、文化を取り入れた都市戦略は、目指すべき新しい都市モデルとして肯定的に捉えられることが多い。一方、社会学者は批判的に分析することが主である。例えば、友岡邦之は、「文化的資源を活用した都市計画」に関心が集まる一方で、「明確な効果を見いだせないままにそうした振興計画がいつの間にか雲霧消してく」と批判的に言及している（友岡 2009: 390）。

現代社会の都市と文化に関する研究動向の主要論点の一つは、こうした都市が形成された社会的・歴史的要因を解明することである。地方自治体の政策転換に帰する研究（Clark 2004）、文化産業の拡大に注目する研究（Scott 2000; Zukin 1995）など様々な知見があるものの、すべての研究で共有されている論点は、1970年代を分水嶺とするグローバルな政治経済的再編への着目である。

第二次大戦後、一貫して進展した産業のグローバルな再編成は、先進諸国における工業社会から脱工業社会への移行、またフォーディズムからポストフォーディズムへの転換という概念で説明されてきた（Bell 1973=1975, Harvey 1990=1999）。なかでも1970年代前半に世界規

模で広まった経済危機は、脱工業化、およびグローバル化を押し進める上で決定的に重要な契機であった。例えばアメリカ合衆国における都市に注目してみても、1971年のブレトン・ウッズ体制の終焉や1973年のオイルショックに伴う景気低迷は、製造業を基盤とした都市経済に決定的なダメージを与えた。その結果として、一方で、新たな経済戦略としての金融経済やグローバルな生産体制に根差した都市空間が形成された（Sassen [1991] 2001=2008）。他方で、製造業にその多くの人口が雇用されていた都市貧困層の、より一層の困窮・孤立（アンダークラス化）が発生した（Wilson 1990=1999）。いずれにしても、1970年代の経済危機は、戦後の西欧・北米諸都市の変化において重要な転換点であった。

1970年代のグローバルな政治経済的再編と都市における文化の関係性について、より明快な説明は、地理学者のデヴィッド・ハーヴェイによってなされた。ハーヴェイは、都市経営における「管理主義 managerialism」から「企業家主義 entrepreneurialism」という概念で1970年代の欧米先進国の都市変動を分析している（Harvey 1989=1997）。

製造業は、第二次大戦後の国家主導の需要創出に 대응する形で、安定した経済成長と好景気の要因となった。フォーディズムと概念化されるこうした経済体制の中で、自治体は「ケインズ主義的な都市」と述べられるような住宅建設など再分配政策に基づいて都市経営を進めた。管理主義とは、1960年代のフォーディズム的・ケインズ主義的時代における都市経営、すなわち製造業を基盤として、再生産領域へ国家や自治体が介入し再分配が重視された都市を意味する。

その後、グローバルな政治経済的再編は、管理主義の基盤を掘り崩すとともに、国外からの資本投下の増加をもたらした。都市は脆弱化した産業基盤ゆえに、投資と企業誘致をめざし、流動する外部資本をめぐるグローバルな都市間競争のなかに巻き込まれる。その結果、自治体が積極的に企業に働きかけ結びつくことでかろうじて都市経営の維持を目指す企業家主義的な都市戦略が生み出された。

ハーヴェイの分析が特に興味深いのは、「管理主義」から「企業家主義」という都市経営戦略の転換の中で、都市における文化の役割が大きく転換するという指摘であった。

ジェントリフィケーションや文化上の革新、さらに（ポストモダン様式の建築や都市デザインへの転換を含む）都市の物質的環境のグレードアップや（スポーツジムやコンベンションセンター及び大規模小売店舗、マリーナやエスニック・レストラン等の）消費者のためのアトラクション（都市的スペクタクルが一時

的ないし永続的に組織化された) 娯楽などのすべてが、都市の再興をはかる上ではるかに有力な戦略的意味を帯びるようになったのだ。つまるところ都市は、居住地や訪問先、あるいは遊技場ないし消費の場として、革新的で刺激に満ちあふれ、創造的であるとともに安全でもあるようにたち現れる必要があるのである。(Harvey 1989: 9=1997: 42)

グローバルな都市間競争の文脈のなかで、都市の文化生産・消費の機会に対する需要が高まるというハーヴェイの説明は、現代社会の都市と文化を考える際に一つの見取り図を与えてくれる。

ここまで近年の都市研究における都市と文化の論点を説明してきた。ただ考えてみると、都市と文化というトピックは都市論において古典的な問いの一つであった。例えば、ルイス・マンフォードは、古代から現代までにいたる文明的な都市論のなかで次のように述べていた。

都市とは、歴史をみると分かるように、コミュニティの権力と文化の最大の集中点である。……ここ都市では文明の財宝が幾層倍にもふえ、多様化され、ここそ人間の体験が生ける表象、象徴、行動のパターン、秩序の体系などにうつついれられる所なのだ。(Mumford 1970=1974: 3)

ルネサンス期における都市の為政者の権威を表象する文化的建築物や、19世紀末のアメリカ諸都市におけるシビック・プライドを高めるための美術館建設など、都市において政治経済的な目的のために文化が利用されることそれ自体は新しい現象ではない。

しかし、それにもかかわらず都市と文化の関係性が、今日あらためて議論されているのは、グローバルな政治経済的論理のなかで構築された都市の文化に対する、人々の違和感に起因している。都市社会学者であるマヌエル・カステルは、グローバルなものローカルなものに関する今日的な問題を論じる中で次のように述べている。

このように、人々は場所に住んでいる。しかし、我々の社会の機能や権力は、フローの空間によって組織されているために、その論理の構造的な支配は場所の意味や力学を根本から変えてしまう。場所との関わりから生まれる経験は、権力によって奪い取られる。意味はますます知識から分離される。こうして、社会のコミュニケーションの回路を破壊するおそれのある、二つの空間論理のあいだの構造的な分裂にいたるのである。二つの空間を、文化的にも政治的にも物理的にも架橋することがなければ、二つの世界の中を生きることになるだろう。(Castells [1996] 2000: 459)

都市の文化が、外部からの圧倒的な力の論理に左右されつつ生活者の論理と乖離していく。こうした現状に対する違和感が、現代社会においてあらためて都市と文化の関係性を問い直す都市研究の背景にあると考えられる。

### 3. 芸術家街とジェントリフィケーション

ここ数年、筆者は都市における芸術家の集住地区と、その地区の空間変動をテーマに研究を行ってきた。芸術家の集住現象は、「芸術家村 artist colony」や「芸術家コミュニティ artist community」と呼ばれるが、本稿では、特に「都市」における芸術家の集住であることを明確にするため「芸術家街」と呼ぶことにする。

芸術家村と呼ばれる農村部における芸術家（主に作家・画家）の集住は、19世紀の欧米社会では既に存在していた。ミレーやコローが居住した19世紀フランス・バルビゾン村は芸術家村の一例である。その後、芸術家の集住地域は、都市の歓楽街の傍ら、もしくは都心の衰退地域にも形成されるようになった。近代的な生活様式が広まる中で、世俗的な価値観を忌避した「ボヘミア Bohemia」と呼ばれる人々が都心の特定地区に集まったのだ。20世紀初頭のパリ・モンマルトルやモンパルナス、ニューヨークのグリニッジ・ヴィレッジは、ボヘミアの集住した芸術家街の代表である。

芸術家街は、チャイナタウンやスラムなど、エスニック・マイノリティの集住地区同様、都市のモザイクを構成する「下位文化」として存在してきた(Fischer 1975=2012)。シカゴ学派の都市社会学者たちも、ボヘミアが集う芸術家街について断片的にはあるが言及している。アーネスト・バージェスは中心業務地区の外周に形成される遷移地区の芸術家街について言及した(Burgess [1925] 1984=2012: 31)。また、ハーヴェイ・ゾーボーはシカゴのタワータウンにおいて形成された「ボヘミアの王国」について描写した(Zorbaugh 1929=1997: 104-23)。

芸術家街を契機とするジェントリフィケーションは、20世紀初頭には一部の都市で部分的には確認されていた(Ware 1963)。しかし、1970年代以降、前節で述べたような都市と文化の関係性の変化の中で、欧米主要都市の多くでも確認されるようになった。芸術家街の形成を契機として商業画廊や飲食店が流入し、最終的に当該地区の人口・建築物・地価が刷新される事例が増加した。例えば、サンフランシスコのヘイト・アシュベリー地区、パリのマレ地区、ベルリンのクロイツベルク地区、ニューヨークのSoHo地区である。こうした変動現象は、都市論では「ジェントリフィケーション gentrification」と呼ばれてきた。ジェントリフィケーションとは、主に、

衰退したインナーシティの特定地区が、何らかの要因によって再価値化されるプロセスを意味している。ジェントリフィケーションを引き起こす要因としては、民間主導の不動産開発を中心に、歴史保全地区への指定、ゲイ・コミュニティの形成など、多様な契機が知られているが、芸術家街の形成はこうした要因の一つである。

筆者は、芸術家街の中でも代表的な事例として知られる、ニューヨーク市のSoHo地区を研究している。SoHo地区は、マンハッタン南部（ローアー・マンハッタン）に位置し、およそ40ブロックからなる。20世紀初頭以降、ローアー・マンハッタンは製造業の集積地区であったが、脱工業化の進展によって1950年代以降産業が衰退し未利用の工場建築物が増加した。その後、より広いスペースと安価な賃料を求めた芸術家が空室となった工場建築物に居住し始め、芸術家の一大集住地区となった。1970年代初頭以降、SoHoに移り住む芸術家の数は増加し芸術家街というイメージが形成される中で、芸術家以外の中産階級の人々も居住し始めた。また、同じ頃、画廊・小売店・飲食店が流入し一気に消費空間へと変化した。中産階級の住人や画廊・飲食店が増加するにしたがって、地価や家賃は上昇し、既存の労働者や貧しい芸術家は追い出されることになった。

現時点での筆者の課題は、芸術家とジェントリフィケーションの因果連関を明らかにすることである。果たして芸術家は、空間を変化させる独立変数であるのか。もしくは他の根本的な要因があり、それを媒介する要因に過ぎないのか。芸術家と空間変動の関係性への問いは、芸術家の集積がジェントリフィケーションを引き起こすという通説的な理解があまりに広まっているため、その因果関係が十分に検討されることは少なかった。逆に、こうした理解の曖昧さが、時に、芸術家が街を変える、といったような安易な街づくりに至る一因なのではないかと考えている。芸術家街とジェントリフィケーションの関係性に着目し、現代都市における芸術家と都市の関係性を考えることが現在の筆者の仕事である。

#### 4. 大阪における芸術家の集住

2000年代に入ると、芸術家街を契機としたジェントリフィケーションの研究は増加した。シカゴのヴィッカーパーク (Lloyd 2006)、ニューヨークのウィリアムズバーグ (Zukin 2010=2013)、フィラデルフィアのラティーノ地区 (Wherry 2011)、ロンドンのホクストン (Platt 2009) といった西欧や北米諸都市だけでなく、北京の798芸術区、ソウルの文来洞などアジアの都市についても関心が集まっている。

一方、日本ではこうした動向がそれほど顕著ではない。

そもそも日本においては、都心の衰退地区において自然発生的に芸術家が集住する現象が存在するのだろうか。近年のアート・イン・レジデンスの広がりの中で、地方都市や農村において「芸術家村」と名付けられたレジデンス施設はいくつか見受けられる（例えば、小豆島芸術家村など）。また、歴史を見渡してみれば、日本においても芸術家の集住地域はいくつか存在したことが指摘されている。1930年代から40年代、小熊秀雄や松本峻介が活躍した東京の池袋モンパルナス (宇佐美 1990)、芥川龍之介や室生犀星が一時居住していた田端文士村、同じく第二次大戦前に大阪・天王寺の山王地区界隈に存在していた芸人の集ったてんのじ村である (難波 1987)。しかし、現代日本の都心部において、欧米や他のアジアの都市で見られるような、空間的に観察可能な芸術家街の存在はあまり明確ではないように思われる。

このような意味で、大阪市の住之江区北加賀屋、此花区梅香・四貫島地区に形成されつつある芸術家の集住地区は大変興味深い事例である。2000年代に入ってから「北加賀谷クリエイティブ構想」(北加賀谷)・「此花アーツファーム構想」(此花) プロジェクトが進み、空き家になった工場跡や倉庫に芸術家が入居し制作・展示活動を行っている (朝日新聞 2013年1月20日朝刊)。筆者は、此花区のギャラリー (the three konohana) や芸術家宅でのイベント (MIIT House) に何回か足を運んだことがあるが、特に外国人の芸術家が多く、こうした空間が大阪で形成されていることに驚かされた。二つの地区の形成は、政岡土地や千島土地といった所有・不動産会社が、未利用の不動産を有効活用するために芸術家に貸し出したことがきっかけとされる。この意味では、欧米諸都市における自然発生的な芸術家街の形成プロセスとは異なるかもしれない。

北加賀谷や此花の事例は、現時点ではジェントリフィケーションに至る兆しは見られない。例えば欧米の事例では、芸術家の集住が始まってから5年程度でジェントリフィケーションの兆しがみられることが多い。この意味で、北加賀谷や此花は、欧米とは明らかに異なる特徴を持つ事例である。なお、近年香港で形成された芸術家街においても、欧米型パターンには当てはまらない事例の推移が報告されている (清水 2011)。芸術家と空間変動の関係性は、地区の不動産の特徴や都市経済の構造など、地域固有の要因の中で変動の推移が多様化していく。大阪や香港の例に見られるように、アジアに限定して見るだけでも、英語圏の既存の枠組みでは分析しきれない多様な状況がある。

社会学では既存の理論の多くが西欧や北米地域の業績に影響を受けており、社会現象を説明する際に無批判に欧米の視点を踏襲してしまうことが少なくない。しかし、そうした分析枠組みでは説明することのできない、地域

固有の事例に向き合っていくことは、既存の理論にはない新たなアイデアを生み出す創造の契機でもある。大阪の芸術家街をめぐる実態と今後の推移は、芸術家街を契機としたジェントリフィケーションの研究、ひいては現代社会における都市と文化に関して、興味深い知見を提示しうる可能性を秘めている。

## 注

1. コロンビア大学の Saskia Sassen, ハーバード大学の Robert Sampson, カリフォルニア大学のパークレー校の Roiq Wacquant を指している。

## 文献

Bell, Daniel, 1973, *The Coming of Post-industrial Society*. (=1975, 内田忠夫ほか訳『脱工業社会の到来：社会予測の一つの試み』ダイヤモンド社..)

Burgess, Ernest, [1925] 1984, "The Growth of the City: An Introduction to a Research Project," Robert E. Park and Ernest burgess (eds.) *The City: Suggestions for Investigation of Human Behavior in the Urban Environment*, University of Chicago Press. (=2012, 松本康訳「都市の成長：研究プロジェクト序説」松本康編『都市社会学セクション①近代アーバニズム』, 21-38)

Castells, Manuel, [1996] 2000, *The Rise of the Network Society* (2nd ed.), Oxford: Blackwell.

Clark, Terry N., 2011, *The City as Entertainment Machine*, Oxford: Elsevier.

Fischer, Claude C., 1975, "Toward a Subcultural Theory of urbanism," *American Journal of Sociology*, 80(6): 1319-41. (=2012, 広田康生訳「アーバニズムの下位文化理論に向かって」森岡清志編『都市社会学セクションⅡ都市空間と都市コミュニティ』日本評論社.)

Florida, Richard, 2002, *The Rise of the Creative Class*, New York: Basic Books. (=2008, 井口典夫訳『クリエイティブ資本論』ダイヤモンド社..)

Harvey, David, 1990, *The Condition of Postmodernity*, Cambridge & Oxford: Blackwell. (=1999, 吉原直樹監訳『ポストモダン性の条件』青木書店.)

Lloyd, Richard, 2006, *Neo-Bohemia*, New York: Routledge.

Mumford, Lewis, 1970, *The Culture of Cities*, New York: Mariner Books. (=1974, 生田勉訳『都市の文化』鹿島研究所出版会.)

難波利三, 1987, 『てんのじ村』文春文庫.

南條史生, 2008, 「美術館の未来と可能性」森美術館編『大型美術館はどこへ向かうのか?』慶應義塾大学出版会, 1-16.

Pratt, Andy C., 2009, "Urban Regeneration: From the Arts 'Feel Good' Factor to the Cultural Economy: A Case Study of Hoxton," *Urban Studies*, 46(5-6): 1041-61.

Sassen, Saskia, [1991] 2001, *The Global City: New York*, London, Tokyo, Princeton: Princeton University Press. (=2008, 伊豫谷登土翁監訳／大井由紀・高橋華生子訳『グローバル・シティ』筑摩書房.)

清水真帆, 2011, 「グローバル経済下における芸術地区による都市の再生と持続可能性に関する一考察：香港・火炭に関する事例研究」『都市研究』, 11.

友岡邦之, 2009, 「地域戦略に動員される文化的資源：文化的グローバル化の陰面としての自治体文化政策」『社会学評論』, 60(3): 379-95.

宇佐美承, 1990, 『池袋モンパルナス』集英社.

Ware, Caroline, 1963, *Greenwich Village 1920-1930*, Berkeley: University of California Press.

Wherry, Frederick F. and Tony Rocco, 2011, *The Philadelphia Barrio: the Arts, Branding, and Neighborhood Transformation*, Chicago: University of Chicago Press.

Wilson, William J., 1990, *The Truly Disadvantaged: The Inner City, The Underclass, and Public Policy*. (=1999, 青木秀男監訳／平川茂・牛草英晴訳『アメリカのアンダークラス：本当に不利な立場に置かれた人々』明石書店.)

Zorbaugh, Harvey W., 1929, *The Gold Coast and the Slum*, Chicago: The University of Chicago Press. (=1997, 吉原直樹・桑原司・奥田憲昭・高橋早苗訳『ゴールド・コーストとスラム』ハーベスト社.)

Zukin, Sharon, 1982, *Loft Living*, Baltimore & London: The Johns Hopkins University Press.

———, 1995, *The Culture of Cities*, Cambridge: Blackwell.

———, 2010, *Naked City*, Oxford: Oxford University Press. (=2013, 内田奈芳美・真野洋介訳『都市はなぜ魂を失ったのか』講談社.)

# Sociology of City and Culture: From the Standpoint of Recent Studies of Artist-led Gentrification

Hideaki SASASHIMA

Although urban redevelopment projects utilizing culture have been prevailing all over the world, the effects of the projects are quite controversial. Some scholars say that cultural facilities, such as museums and sports stadiums, contribute to regenerate urban economies and then improve residents' everyday lives. On the other hand, others argue that such culturally promoted urban redevelopments

only lead to urban spatial inequalities: rises in rent and the eviction of low income people.

I have been focusing on these current situations between city and culture, especially on a case study of the artist-led gentrification of SoHo in New York City between the 1950s and 1970s. Not only in Europe and North America, but also in Western Asia, countries have experienced the gentrification caused by the agglomeration of artists. 798 Art Districts in Beijing and Mullaeh in Seoul are famous examples. Taking a look at Osaka, we can find a few artists' neighborhoods, but there are hardly any signs of gentrification. Why don't artist neighborhoods lead to gentrification in Osaka? Compared to most artist neighborhoods leading to gentrification in various countries, Osaka's case is rare and thus research into it will give us quite fruitful findings of the relationships between artist neighborhoods and gentrification.

Keywords : Globalization, City and culture, Artist neighborhood, Gentrification, Subculture